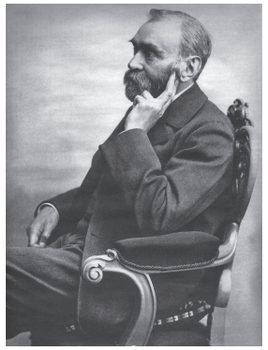
明日への道標

ダイナマイト王と呼ばれて
―大富豪ノーベルの遺言―

㈱日本設備工業新聞社
代表取締役社長　高倉克也


アルフレッド・ノーベル

世界でもっとも権威のある賞と見做されているのがノーベル賞だ。いまや受賞者は国家的な栄誉を担う存在となっている。だがノーベル賞が制定された経緯やノーベル自身については意外と知られていない。ダイナマイトの発明者としてヨーロッパ随一の大富豪となったノーベルはなぜ巨万の富を惜しげもなくノーベル賞につぎこんだのか。その理由を知ることは企業の社会的貢献＝社会的責任について考える貴重な糸口となる。

宿命的なコスモポリタン

アルフレッド・ノーベル（1833－1896）はスウェーデンの首都ストックホルムで生まれた。建設業を営む父イマヌエルはノーベルの幼いころ事業に失敗し、新天地を求めて1837年、単身でロシアのサンクトペテルブルクに移住する。残された母アンドリエッテとノーベル兄弟は場末の小さな店で野菜や牛乳を売って生計を立てるという貧しい暮らしを余儀なくされた。

やがてイマヌエルは軍備増強に力を入れていたロシアにみずから発明した機雷や地雷を売り込み、工場を建てて大成功を収めた。1842年、ようやく家族は裕福になった父のもとに呼び寄せられる。

父の仕事に興味をもったノーベルは頻繁に工場へ足を運び、機械や爆発物の基礎知識を学んだ。息子の才能を見込んだ父は化学と語学を中心に何人もの家庭教師をつけて英才教育を施す。期待に応えたノーベルは急速に化学に精通し、ロシア語、ドイツ語、フランス語、英語などをマスターした。

17歳になったノーベルは海外遊学を勧められ、1850年にパリ、翌年アメリカに渡って化学の勉強に励んだ。正規の学校教育は小学校低学年までであとはすべて独学ということになる。

幼くして故郷を離れ、複数の外国語を習得し、欧米諸国で多感な時期を過ごすという特異な経験はノーベルの人格形成に少なからぬ影響を及ぼしたはずだ。ノーベル賞が国籍を問わず授与されるようにノーベルは宿命的にコスモポリタン＝世界人としての生きかたを身につけていった。のちにフランスの文豪ヴィクトル・ユーゴーはノーベルを「ヨーロッパでもっとも裕福なさすらい人（びと）」と呼んでいる。

死の商人という汚名

1853年に勃発したクリミア戦争で大儲けした父の事業はロシアの敗退後しだいに失速し、1859年ふたたび破産する。工場の残務整理を次兄に任せたノーベルは長兄と共に爆発物の本格的な研究を開始し、とくに液体状の危険な爆薬であるニトログリセリンの安全な製造・使用法を探究した。

1862年に起爆装置を開発して水中爆発実験に成功、翌年スウェーデンで特許を取得した。だが1864年9月に工場で爆発事故が起こり、弟と助手たちを失うという悲劇に見舞われる。

ノーベルは同年11月、世界初のニトログリセリン製造会社を設立し、さらに安定性を高める研究に没頭した。そして1866年、ギリシャ語で力を意味するダイナマイトを発明する。

ダイナマイトは改良を重ねるごとに爆発的な売れ行きを示し、世界中の建設・土木・掘削工事などで活用された。同時にヨーロッパ列強諸国の軍備拡張に伴い新たな軍事兵器へと転用される。

勢いに乗るノーベルは世界50カ国で特許を得て100近くの工場をもつ文字どおりのダイナマイト王となった。1878年には兄たちとロシアのバクーで石油会社を設立し、油田開発でも莫大な利益を獲得した。

しかし経済的成功とは裏腹に1888年フランスの新聞に掲載された記事がノーベルを震撼させる。見出しは「死の商人、死す」で本文には「かつてないほど大勢の人間を殺害する方法を発見し、富を築いたアルフレッド・ノーベル氏が昨日、死亡した」と書かれていた。

これは病死した兄とノーベルを完全に取り違えた誤報記事だった。とはいえ少年時代からバイロンとシェリーの詩を愛し、科学技術の進歩による人類への貢献という牧歌的なロマンを抱いていたノーベルにとって極悪人のレッテルは耐え難い苦痛だったに違いない。

生涯独身だったノーベルはこの頃からノーベル賞の設立に関する遺書を残す気になったようだ。とりわけ平和賞はみずからの汚名を晴らす切実な想いを込めたものとして設けられたといっていいだろう。

国境なき平和のために

1891年、ノーベルは長年にわたって暮らしていたパリからイタリアのサンレモに移り住む。母と兄の死がきっかけだった。孤独のうちに一時期は鬱病になっていたこともある。

1895年の11月27日、持病の心臓病が悪化したことからパリで遺言状を書く。内容は彼の遺産で基金を設け、利子を人類のために最大の貢献をした人たちに賞の形で分配するというものだった。基金に充てる金額は現在の価値で15億クローネ、日本円に換算して約209億円だったという。

対象となる賞は物理学、化学、医学、生理学、文学などの分野に加えて「国家間の友好、軍隊の廃止または削減、平和会議の開催の促進といった仕事に最大もしくは最良の業績をあげた人物に贈られるものとする」と明記した。そして最後に「賞を与えるにあたっては、候補者の国籍は一切考慮されてはならず、スカンジナビア出身であろうとなかろうと、もっともふさわしい人物が受賞しなくてはならないというのが、私のとくに明示する希望である」と付け加えた。

国境なき平和賞の創設にはかつてノーベルの秘書を務め、結婚も考えていたベルタ・キンスキーの存在も深く影響していた。1890年頃からヨーロッパ各地で国際的な平和運動の気運が高まったとき、オーストリア人のベルタは母国で指導者のひとりとなる。

ノーベルはベルタに宛てた書簡で「われわれがなすべきことは、平和を侵すものに対して、すべての国家がみずからの意志で調停裁判を実施し、世界各国が調停宣言を行うような社会をつくることです」と記した。いわば国連のような調停機関の設立を望んでいたのだろう。彼が愛し、最後まで支援したベルタは1905年、女性初のノーベル平和賞を受賞した。

1896年の冬、ノーベルはサンレモの自宅で脳溢血で倒れ、３日後に63歳で他界する。死の床には親戚もまにあわず召使いがいるだけの孤独な最期だった。

人類の進歩と平和への貢献というノーベルの意志はあまりにも高邁で深遠で壮大すぎたのかもしれない。しかし死の商人と罵られ、孤高の運命を生き、幸福な家庭生活にも恵まれなかったノーベルが一通の遺書に込めた願いはひしひしと伝わってくる。